

14—15世紀の黒海沿岸とロシア

松 木 栄 三

I

13世紀の東欧に生じた二つの政治的変動——第4回十字軍によるラテン帝国の形成とモンゴルによる東欧征服——は、黒海沿岸地方の交易関係の様相を一変させた。1204年のコンスタンチノーブル陥落とラテン帝国の成立は、イタリア人商人がそれまでビザンツ帝国によって閉鎖されていた黒海岸一帯にめざましい勢いで進出する契機となった。13世紀の前半には、まずラテン帝国の積極的協力者だったヴェネチア人がコンスタンチノーブルでの主導権とボスフォロス海峡の独占的航行権を獲得し、黒海沿岸各地、とくにクリミアへの進出をはたす。だが1261年にニケーアのギリシャ人皇帝ミハイル八世パレオロゴスがコンスタンチノーブルを奪回すると、今度はその同盟者だったジェノヴァ人がヴェネチア人に代ってコンスタンチノーブルと黒海貿易の支配的地位を手中におさめる⁽¹⁾。コンスタンチノーブルと黒海をめぐるジェノヴァとヴェネチアの争いは、何度かの戦争を含めその後も長くつづくことになる⁽²⁾。しかし黒海に関する限り、ジェノヴァの優位は1261年以降最後まで——つまりオスマン・トルコによりイタリア人全体が黒海全域から駆逐されてしまう15世紀後半まで——ゆるかなかったのである。すでに13世紀後半には、クリミア半島とカフカース西海岸一帯にジェノヴァ人の交易拠点が数多く出現することになる。

イタリア人の黒海進出とはほぼ時を同じくし、彼らの活動舞台をととのえる条件ともなった

(1) 1261年のニンファ条約はアレクシオス・コムネノス帝の金印勅書により1082年以来ヴェネチア人に与えられていたレバントでの商業特権を、一転してジェノヴァ人の手に移す大きな意味をもった。ジェノヴァ人は帝国内の無関税特権や黒海航行権のほか、コンスタンチノーブル、サロニカ、小アジア西海岸、エーゲ海のレスボス、キオス、クレタ、エウボエアなどに居留地を得た。コンスタンチノーブルとレバントへのジェノヴァ人の進出については、E. Ч. Скржинская, Генуэзцы в Константинополе в 14 в. "Византийский временник", 1, 1947, стр. 215-234. またヴェネチア人の黒海進出に関しては, cf. Она же, История Таны /14-15 вв./, в кн.: Барбаро и Контарини о России, Л., 1971, стр. 29-64. 参照。

(2) 13世紀末～14世紀末の一世紀間にジェノヴァとヴェネチアは4回戦争し、そのうち少なくとも2回は主に黒海(例えばタナ支配)をめぐるものであった。14世紀のレバントをめぐる両者の確執については、E. Ч. Скржинская, Петрарка о генуэзцах на Леванте. ВВ, 2, 1949, стр. 245-266. 参照。

もう一つの政治的変動は、モンゴル人の征服活動のあと、黒海・カスピ海沿岸全域を拠点として成立した金帳汗国の支配である⁽³⁾。金帳汗国のタタール人は11～13世紀にステップ全域を支配していたトルコ系キプチャク人（ロシア名ポロヴェッツ人）とその北方ロシア平原に住むロシア人の大部分を征服し、黒海・カスピ海沿岸からバルト海にいたる実に広大な領域を支配下におさめた。それまで分立していた広い空間が同一の政治権力に服し、しばらくは相対的に安定した政治状況が生まだされたことがイタリア商人に恰好の活動舞台を提供することになる。しかも、ヴォルガ下流のサライに本拠を据えたタタール人は急速にカラコルムとのつながりを失い、黒海・カスピ海沿岸地方に古くから形づくられていた交易関係や文化的結びつきを受容していった。オルダーはクリミアや黒海北岸に集まる交易路と商業圏（ここでは古くからギリシャ人やアルメニア人が活躍していた）をキプチャク人から継受した⁽⁴⁾。ちょうどこの時期、コンスタンチノーブルに足場をかためたイタリア人が相次いで黒海にやって来る。タタール人は彼らの商業活動を許容し、沿岸都市の内部に居留地を与えたり海岸の全く新しい土地を提供したりした。イタリア人はタタール汗の宗主権を認め取引商品については3%の関税を支払う条件で、クリミア海岸やアゾフ沿岸、カフカース西岸などに次々と港湾や植民都市を建設する。こうして14世紀には、黒海沿岸全域にジェノヴァ、ヴェネチア、ピサなどによる植民都市、港、城塞など交易上の根拠地が大小数十も出現することになる⁽⁵⁾。

これら植民都市のうち黒海商業史上最も重要な地位を占めたのは、クリミア東海岸のカッファ（ロシア名フェオドシア）とソルダイア（ロシア名スロジ）、それにアゾフ海のドン河口にあったタナ（ロシア名アゾフ）とである。カッファは終始ジェノヴァ人が支配したのに対し、ソルダイアではヴェネチア人の主導権がジェノヴァ人に奪われ、タナでは両者の力は伯仲したがヴェネチア人の優位がなんとか維持された。なかでも《クリミアのコンスタンチノーブル》とまで呼ばれたカッファの繁栄と力とは群を抜いていた。ジェノヴァ人がクリミア東岸の土地を買いカッファの建設に着手したのは1260年代のことであったが、14世紀のなかばには、それはすでに城壁と塔に囲まれた完全にヨーロッパ風の都市に成長していた。外交、軍事、警察の幅広い権限を委ねられたカッファのコンスルには《ガザリア帝国および全黒海の最高コンスル》の称号が与えられていた。都市の周辺にはかなり広いジェノヴァ人の支配領地が形成されていたし、クリミア東南岸にならぶ一連の都市、チェンパロ、ソルダイア、ケルソン（ロシア名コールスニ）なども次第にカッファの完全な支配下におかれるようにな

(3) ヴォルガ下流を本宮とした金帳汗国がバトゥのもとで形を整えるのはほぼ1242年頃である。オルダーの成立については、G. Vernadsky, *The Mongols and Russia*, New Haven-London, 1953, pp. 138-232.; ヤクボフスキー、グレコフ共著（播磨博吉訳）金帳汗国史、生活社、1942、p. 45-55. 参照。

(4) 13世紀前半のキプチャク（ポロヴェッツ）人支配下のクリミアと黒海北岸の商業については、A. Д. Якубовский, *Рассказ Ибн-ал-Биби о походе малоазийских турок на Судак, половцев и русских в начале 13 в. / Черты из торговой жизни половецких степей. /* ВВ, т. 25, 1928, стр. 53-76. 参照。

(5) 14世紀末にはジェノヴァの植民地拠点はクリミアに40カ所、アゾフ海と黒海東岸に39カ所存在したという。佐口透『モンゴル帝国と西洋』平凡社、pp. 165-166。

った。ケルチ海峡の両岸にはチェルコとマトリカ（ロシアの旧トムトロカニ）の城塞を建設してアゾフ海への出入りを掌握し、タナに航行するヴェネチア人をいつでも封鎖できる態勢をつくりだしていた。14世紀のカッファは630艘もの海洋航行用船舶を保有し、それらは黒海とアゾフ海のあらゆる航路を縦横に往来して多くの商品をはこんだ⁽⁶⁾。むろんカッファにはさまざまな外国商人も集まってきた。イタリア人以外でカッファに特に多かったのはアルメニア人とギリシャ人で、彼らはそれぞれ市内に独自の教会と主教をもつ大きな住民集団をなしていた⁽⁷⁾。サライヤストラハンからはタタル商人も、北方からはドン、ヴォルガ水路でロシア人も訪れたし、黒海西岸のドニエステル、ドナウ河畔からはブルガール人、ワラキア人、モルダヴィア人などもやってきた。カッファは文字通り黒海商業の中心となったのである。

カッファに代表される黒海岸都市のこのような股販を生んだものは、いうまでもなく黒海貿易であり、クリミアや黒海沿岸に四方から運ばれてくる東西の豊かな商品である。イタリア人を黒海にひき寄せた第一の要素は、アラブ地域、ペルシャ、インド、中央アジア、中国などからの東方商品である。十字軍のレバントからの敗退とともに紅海・シリア経由の東方交易は衰え、アラブ地域、ペルシャ、インドの商品はアルメニアをへて黒海南東岸のトレビゾンドに送られるようになったり、あるいはカスピ海からアストラハンやサライを経由してタナ、カッファに集積するようになった。中国と中央アジアの商品もサライを経てタナやクリミア諸都市に入ってきた。インドの香料（香辛料、薬剤、染料）、貴金属と宝石、ペルシャ湾の真珠とペルシャの織物、アラブ地域の武具や絹織物などはトレビゾンド、タナ、カッファに集まるイタリア商人の重要取引品目だった⁽⁸⁾。ギリシャ人都市であるトレビゾンドにはジェノヴァ人もヴェネチア人もそれぞれの居留地とコンスルを持っていたし⁽⁹⁾、ジェノヴァ人はイランのタブリーズ、スルタニアなど黒海岸に送られる東方商品の集積地となっていたイル汗国の内陸都市にまで入り込みコントローレを持っていた⁽¹⁰⁾。

しかし黒海商業の繁栄は決して東方の商品だけに由来するのではない。イタリア商人は西欧や地中海から各種の毛織物、銅、錫、ブドウ酒、ガラス、紙、亜麻布、麻布などを黒海に搬入した⁽¹¹⁾。彼らがこれらの商品を対価として買い入れた商品のうちには、黒海貿易に固

(6) П.П.Мельгунов, Итальянские купцы и Юго-Восточная торговля в 14-15 вв. в кн.: Очерки по истории русской торговли 9-18 вв. М., 1905, стр. 126-133.

(7) 15世紀後半にカッファで最も多かったのはアルメニア人で全住民の3分の2を占め、次いでギリシャ人が多かったという。支配権を握っていたジェノヴァ人は余り多くなく、1475年のカッファ陥落時に400家族だった。М.Н.Тихомиров, Пути из России в Византию в 14-15 вв., в кн.: Исторические связи России со славянскими странами и Византией. М., 1969, стр.61.

(8) 黒海に集まる東方商品の種類やルートについては П.П.Мельгунов, указ. соч., стр. 39-146. Е.Ч.Скржинская, История Таны, стр.50-52. 参照。

(9) W. Hiller. Trebizond. The last Greek Empire. Amsterdam. pp. 33-39.

(10) П.П.Мельгунов, указ. соч., стр.142-143. 佐川透, 前掲書. pp. 170-172

(11) Е.Ч.Скржинская, История Таны, стр.51-52 なお地中海と黒海間の交易品全般については W. H. Макニール (清水広一郎訳) 『ヴェネツィア』岩波現代選書. pp. 66-72 参照。

有の一連の重要商品があったのである。それらは東方商品の比重を決して下まわるものではなかなただけでなく、交易圏の生活と歴史により本質的な影響を与えたものでもあった。それは第1に、穀物、魚、イクラ、木綿など黒海周辺での産物、第2に、ステップやカフカーズから運ばれて来る男女の奴隷、第3に、毛皮、ろう、蜜、皮革など北方のロシアから来る商品である。穀物はカフファやタナだけでなく、ドニエストル河畔のモンカストロ（ロシア名ベルゴロド）、ドナウ河口のキリア、ブルガリアのヴァルナなどからも盛んに積みだされ、コンスタンチノーブル、ジェノヴァ、ヴェネチアに送られた⁽¹²⁾。ドンやヴォルガの河口、黒海やカスピ海でとれる豊富な魚やイクラは塩づけにされ、地中海だけでなくあらゆる方向に輸出された。しかし14～15世紀の全期間を通じて黒海貿易のもっとも特徴的商品で、またイタリア商人に最大級の利益をもたらしたものは奴隷である。カフファやタナで船積みされ、《マムルーク》としてエジプトのスルタンに、あるいは地中海各地の奴隷需要者に売られるカフカース人、ロシア人、タタール人などは年々数千人に達したといわれる⁽¹³⁾。14～15世紀の黒海沿岸は、16世紀以後の西アフリカの役割を果していたことになる。

この時期の黒海商業にどれだけの比重を占めたか定量するのは不可能だとしても、ロシアと黒海との結びつきも決して無視できないものだった。イタリア人が黒海で活躍を続けた2世紀のあいだ、ロシアの毛皮やろうは常に黒海からの重要な搬出商品であった。そのことはハンザ商人がバルト海に搬出したロシア商品のうちでも、14～15世紀を通じてずっと毛皮とろうの比重が圧倒的だったことと符合している⁽¹⁴⁾。また反対に、黒海のイタリア商人や彼らのもたらす地中海と西方の諸商品がロシアの、とりわけモスクワの商業史や文化史に与えた影響も大きい。14世紀にはモスクワ商人が黒海に往来しただけでなく、イタリア商人もモスクワに来ていた痕跡がある。14～15世紀のモスクワには、黒海経由で入ってくる西方や東方の商品を取扱う特権的な貿易商人層が形成されたほどである。中世モスクワ史の研究者であるチホミロフは、14～15世紀のモスクワにとって最も重要な国際的交易関係は黒海岸都市とのそれだったと書いている⁽¹⁵⁾。

(12) П.П.Мельгунов, указ. соч., стр.136-137.

(13) 黒海からの奴隷の搬出数はむろん正確には判らない。メリグノフはグルジアのメグレリ人だけでも毎年12,000人もが運びだされていたという情報を紹介して、これは過大だといっている。15世紀後半のカフファでは最高3,000人の奴隷が数えられたという。奴隷は一度に何百人もの単位で搬出されることも稀ではなかったらしい。1444年にクリミアからクレタに向うヴェネチア船（ガレー商船か？）は95人の奴隷を運んでいたが、途中キオス島の港でジェノヴァ人に襲われ奴隷を奪われるという事件が起きている。1427年には、タナから運搬されてきた奴隷が一度に400人もイストリアに上陸した記録がある。Е.Ч.Скржинская, История Таны, стр.56.

(14) А.Л.Хорошкевич, Торговля Великого Новгорода с Прибалтикой и Западной Европой в 14-15 вв., М., 1963, стр.337. チホミロフは、14-15世紀のノヴゴロドとモスクワはそれぞれ北のハンザ商人と南のイタリア商人に全く同様な商品（毛皮やろう）を輸出していたと指摘している。М.Н.Тихомиров, Средневековая Москва в 14-15 вв., М., 1957, стр.136.

(15) М.Н.Тихомиров, Средневековая Москва, стр.128-129.

II

黒海のイタリア植民都市のうちモスクワ側の記録にもっともはっきりした痕跡を残しているのは、不思議なことにカッファではなくその南東に隣接していたソルダイア(スダク)、当時のロシア名でスロジである。スロジはカッファより早く、すでに14世紀の初めからモスクワの年代記に言及されるだけではない。14世紀のモスクワでは一般に黒海との交易に従事する貿易商が《スロジヤネ》の名で呼ばれるが、この語は本来《スロジの住民》を意味しており、これらの商人がスロジと深いかわりをもっていたことを示唆している⁽¹⁶⁾。事実、14世紀の年代記に記録されているスロジヤネの名前や渾名を分析した研究者は、その大部分は純粋にロシア的なものだが一部はギリシャ人やラテン系(イタリア人)の氏名に起源をもつとしている⁽¹⁷⁾。彼らが《スロジヤネ》の名で呼ばれるのは、彼らがスロジに居留地をもちそこで生活する時間も多かったからというよりは、その発生史的な起源がモスクワに来て定着帰化した本来のスロジ住民、つまりギリシャ人やイタリア人であったからではなからうか。スロジヤネはモスクワでも最上層の特権的商人であり、^{ゴスチ}大商人と呼ばれる商人身分を代表していた。14世紀の年代記は何らかの必要でモスクワの商工業住民を列举するとき、必ず筆頭に記すのがスロジヤネや^{スーコンニク}ラジャ商人(黒海貿易での毛織物を扱う商人)なのである⁽¹⁸⁾。スロジヤネが黒海との間を往復するのに一番よく利用したのはドン河である。彼らがドン河を下り最初に目にする海はアゾフ海だったが、14世紀にはこれを実に《スロジの海》と呼んでいたのである⁽¹⁹⁾。ドン河口のタナ(アゾフ)で河舟をおり、海洋船に乗りかえてスロジ海を横断し、ケルチ海峡を抜けて黒海にでる。クリミア海岸には40ヶ所にもものぼるイタリアの植民地や港があったが、モスクワ商人は最大の繁栄をほこるカッファの沖を通過し隣りのスロジ港に入港したことになる。スロジがロシアの歴史から完全に姿を消した16～17世紀においてさえ、ロシアでは南方からの輸入品だった絹、毛織物、木綿などの高級布地を《スロジ物》と呼び、モスクワの赤の広場にあったマーケットでは、これら輸入高級布地を売る^{スロフ}アーケードを《スロジもの売場》と呼んでいた⁽²⁰⁾。ロシア人が都市スロジを忘れ去ってしまったあとも、彼らの言語のなかにスロジの記憶は根づよく残ったのである。

(16) モスクワのスロジヤネに関してはシロエチコフスキーの優れた研究がある。В.Е.Сыроечковский, Гости-Сурожане, М.-Л., 1935.

(17) В.Г.Васильевский, Исторические сведения о Суроже. в кн.: Труды В.Г. Васильевского, 3., Пг., 1915, стр.203; В.И.Сыроечковский, указ. соч., стр. 24; И.Е.Забелин, История города Москвы, М., 1902, стр.86-87. Забелинはスロジヤネの中にはロシア人に混ってイタリア人がいたことを指摘したのに対し、ヴァシリエフスキーは年代記中のスロジヤネたちの名前からロシア人とギリシャ人だけを区別している。シロエチコフスキーはスロジヤネの氏名中にロシア人、ギリシャ人のほか一人のラテン系起源のものを認めている。

(18) ПСРЛ, т.11, стр.73, 77.

(19) ПСРЛ, т.10, стр.182 ロシア人はこの海を14世紀には《スロジ海》と呼んだが、15世紀になると《カッファ海》と変りさらに後には《アゾフ海》となる。チホミロフは、この名称変化がロシア人にとって最も重要だった黒海交易都市の時代的変化を示すとしている。М.Н.Тихомиров, Пути из России, стр.67.

このようにみえてくると、モスクワではスロジが黒海交易の相手として最もよく知られた都市だった時代が明らかに存在している。それは多分13世紀から14世紀後半までの時期である。だがこの時代のモスクワはなぜスロジとの間で特に密接な結びつきをもったのだろうか？この疑問を充分解明することはできないが、いくつかの根拠を推定することはできる。

第1の要因は、スロジが古くからギリシャ人の多い町であり、トレビゾンドやシノペやコンスタンチノーブルなどビザンツ圏との結びつきも強かったことである。13世紀にイタリア人が入って来る前の黒海商業の主導権を握っていたのはギリシャ人であり、クリミアにおけるその根拠地となっていたのがスロジやケルソン(コルスニ)だった⁽²¹⁾。トレビゾンド帝国の宗主権下にあった時期はむろんのこと、ステップのトルコ人(ハザールやキプチャク)の政治的支配権を承認している時代にも、ギリシャ人はこの町の住民の主要部分を占め交易と政治の実際の権限を掌握していた。アラブ人の記録によれば、13世紀のなかば、つまり2回のタタール侵入をうけたあともこの町の住民の半数以上はキリスト教徒(ギリシャ人とアルメニア人)であった⁽²²⁾。11世紀以後スロジにはギリシャ正教の大主教座がおかれ、13世紀後半には府主教座に昇格したほどである⁽²³⁾。これはコンスタンチノーブルとの密接な関係をはっきり証明している。13世紀80年代以降ヴェネチアの植民都市になったあとも、イタリア人はビザンツ帝国との関係からしても黒海岸のギリシャ人に相当の独立性と自治権を認めざるを得ず⁽²⁴⁾、ギリシャ人はスロジ住民のなかでなお強い勢力を保っていたと思われる。ギリシャ正教徒であり、宗教、文化、政治のあらゆる側面でビザンツと強い結びつきをもっていたロシア人にとって、ララン人の主導権で建設されたカフファよりもビザンツ的伝統の強いスロジの方がずっと好ましい環境を提供したことは明らかである。モスクワのスロジとの貿易は、イタリア人との取引である前にギリシャ人との交易であった可能性が強い。その点からすればモスクワのスロジャネの中にギリシャ人が見られることに何の不思議もない。ロシアと黒海イタリア植民地との結びつきは、ロシア=ビザンツ関係の延長上に生まれたという側面をもつのである。

モスクワをスロジに結びつけた第2の要因は、モスクワとの関係が成立する以前からこの町にはロシア各地との交易関係があり、市内にはおそらくロシア人の居留地も存在していたこと、また反対にスロジ商人もロシア(特に西南ロシア)に往来していたことである。13世紀20年代のセルジュク・トルコ艦隊によるスロジへの遠征について記したあるアラブ人の記録によれば、スロジにはギリシャ人のほか、アラン人、アルメニア人、キプチャク人、ハザール人にまじってロシア人も住んでいた⁽²⁵⁾。また同年代のセルジュク・トルコの一年代記

(20) Толковый словарь живого великорусского языка В.Даля, т.4, СПб.-М., 1914, стб.641,642.

(21) В.Г.Васильевский, указ. соч., стр.168-169.

(22) Там же, стр.178.

(23) Там же, стр.164, 189.

(24) Там же, стр.188.

は、スロジをキプチャク人およびロシア人と同盟を結んだ独立都市として記録しているという⁽²⁶⁾。スロジにロシア商人がいたことについては西方からの旅行者も証言している。フランシスコ会修道士のルブルクは教皇イノセント四世の親書を携え、金帳オルダの皇子サルタクを訪問すべく、聖地からコンスタンチノーブルを経由して1253年にスロジに上陸している。彼は、スロジが黒海をへだてたシノベの町の対岸にあり、北のロシアからも小アジアのトルコからもあらゆる商人たちが集まってくること、そしてある商人はテン、リスその他の高価な毛皮、別の商人は綿布、紙、絹織物、香料などをこの町にはこび込むと記録している⁽²⁷⁾。13世紀の半ば頃、スロジは明らかにロシア商人が東方や西方の商品とひきかえに毛皮を取引した都市だったのである。反対にスロジの商人がロシアに往来していた証拠も年代記のなかに残っている。イパチェフスキー年代記の1288年、ヴォルニニ侯ウラジミル・ヴァシリコヴィチが病死したときのウラジミル市の住民の悲嘆が次のように叙述される。「かくて彼の死を男も女も子供もすべてのウラジミル市民が嘆き、同じく〔ウラジミル市にいた〕ドイツ人も、スロジ人も、ノヴゴロド人も、またユダヤ人もエルサレムが陥落しバビロンに捕えられた時の如くに嘆き悲しんだ」⁽²⁸⁾ガリーチのウラジミル市にいた《スロジ人》がギリシャ人かイタリア人かの判別はできないが、ロシア各地に往来していたスロジ商人の一部であることは疑う余地がない。以上のように、モンゴル侵入以降13世紀の後半にも、ロシア商人とスロジ商人の相互の往来は着実に続いていたのであり、このことが14世紀にモスクワ＝スロジ間の交易関係を生む有利な前提条件になったことは容易に想像がつく。スロジに既存のロシア人居留地（たとえ東北ロシア人のそれでないとしても）⁽²⁹⁾や伝統的な取引関係があったとすれば、新来のモスクワ商人がロシアとのつながりのまだ薄いカフファよりもスロジを選んだのは当然の成り行きだったといえよう。

最後にもう一点、モスクワをスロジに結びつけた第3の要因として、最初の約一世紀間この町で優位を占めたのはジェノヴァ人ではなくヴェネチア人だったことを考慮する必要がある。ヴェネチア商人のスロジへの定着化はすでにラテン帝国時代に始まり⁽³⁰⁾、1287年にはそのクリミア植民地総督ともいべき《全ガザリア・コンスル》がスロジに配置されること

(25) А.Ю.Якубовский, указ. соч., стр.65.

(26) В.Г.Васильевский, указ. соч., стр.175.

(27) Там же, стр.179-180.

(28) ПСРЛ, т.2, стр.44

(29) СийоETCHOフスキーは、この時期に黒海に來ているロシア人は主に南西ロシアのロシア人であって東北ロシアの人々ではないと指摘する。В.Е.Сыроечковский, указ. соч., стр.16.

(30) マルコ・ポーロの伯父の一人マルコは、すでにラテン帝国時代にスロジに家を所有していて二人の子供を住ませ、自分はコンスタンチノーブルに住んで商売をしていたという。マルコ・ポーロの父ともう一人の伯父（ニコロとマッテオ兄弟）が1260年にスロジに上陸しているのも多分その点と関係している。兄弟の有名な中国への大旅行の出発点はこのスロジだったのである。伯父マルコの遺言状（1280年）は、スロジに所有する家を二人の子供が一生涯使ったあと同都市に住むフランシスコ会修道士に寄進するよう遺言している。В.Г.Васильевский, указ. соч., стр.180-181.

で一応の完成をみた。同時にクリミアの支配権をめぐるジェノヴァ人との争いは一層激化する。カフファのジェノヴァ人はあらゆる手段でヴェネチア人の活動を封じ込めようとし、ヴェネチア人もジェノヴァ人に対しスロジでの3日以上滞禁止、スロジでの一切の取引、カフファへの商品の積出し禁止などの対抗手段をつきつける⁽³¹⁾。モスクワの商人が始めてスロジに姿をあらわすのは、このようなスロジ=カフファ間の激しい争いが展開している頃だったと思われる。ジェノヴァとヴェネチアの争いは13～15世紀の黒海商業史を貫く一本の《赤い糸》であって、いかなる商人もこの争いの完全な部外者のまま黒海貿易に加わることはできなかったといえる。ロシア人も例外ではない。新参者のモスクワ商人もスロジを拠点とする限り、ヴェネチア人を支持する以外に道はなかったであろう。しかしヴェネチア人との結合はモスクワにとって結果的に好ましい選択だったことが判明する。ジェノヴァ人は一般に交易と市場の独占に性急で、以前からこの地の商業に支配的地位を占めていたギリシャ人やアルメニア人に対し干渉的ないし抑圧的な政策をとる傾向があったからである⁽³²⁾。さらにカフファのジェノヴァ人は黒海およびその後背地での商業独占権を確保するために積極的に金帳オルダールの権力に取り入り、いきおい政治的にもタタール人に協力ないし連合することが多くなった。だが14世紀を通じて次第に勢力を増しロシアの新しい中心に成長しつつあったモスクワにとって、金帳オルダールはその支配からの脱却をこそ目標とする究極の敵であった。そのオルダールに力を貸すジェノヴァ人がモスクワにとって好ましい商人であるはずはない。1380年、モスクワ侯ドミトリーがロシアに対するモンゴル支配の成立以来始めて軍事的にタタール軍を破った歴史的な戦闘においても、カフファのジェノヴァ人はタタール汗ママイと条約を結びその軍勢の一翼を担ったのである⁽³³⁾。敗走したママイは同盟者であるジェノヴァ人にかくまわれカフファに逃げ込むが、金帳オルダール内の権力交替を読んだジェノヴァ人の裏切りで殺される⁽³⁴⁾。このような政策をとるジェノヴァ人にモスクワ商人が結びつきにくいのは当然である。スロジの支配権がジェノヴァ人の手に移ったのは1365年のことであり⁽³⁵⁾、これ以後になってはじめてモスクワはスロジに執着する必然性を失ってゆく。モ

(31) Там же, стр.186.

(32) 例えばカフファのアルメニア人やギリシャ人はそれぞれ独自の主教と教会をもっていたが、ジェノヴァ人はしばしば彼らの主教選出に介入した。また15世紀のフィレンツェ公会議の教会合同後にはカフファのアルメニア人とギリシャ人にその教会合同を強要して迫害させたとされる。その結果カフファのギリシャ人教会は合同を受け入れている。М.Н.Тихомиров, Пути из России, стр.62, 67.

(33) 1380年にカフファはママイとの間で条約を結び、ママイの軍事行動によって一時的に奪われていたスロジ周辺の農村部分(スロジには18の付属行政地区=集落が所属していた)をジェノヴァ人の手にとりもどしている。多分この協定とひきかえにママイはロシアへの遠征にカフファのジェノヴァ人やアルメニア人が参加することを要求したのであろう。ロシアのいくつかの年代記はママイ軍にイタリア人やアルメニア人が加わっていたことを伝えている。В.Г.Васильевский, указ. соч., стр.197-198; ПСРЛ, т.23, стр.124-125, т.20, стр.200.

(34) ママイは少数の部下と大量の財宝だけをもってカフファに逃げ込むが、ヴェルナドスキーはこの財貨で新たにここで兵を雇うものと彼が期待していたのだとしている。G. Vernadsky, op. cit., p. 263.

(35) В.Г.Васильевский, указ. соч., стр.197.

スクワの年代記のスロジャネやスロジについての記録が14世紀に集中し、15世紀には全く消えてしまうのもその間の事情を反映している。こうしてみると、モスクワが黒海を介して14世紀に接触したイタリア人(フリャジ)は主にヴェネチア人だったと推定できる。すでにモスクワ大侯イワン・カリター(1325～41)はマトフェイ・フリャジンなるイタリア人に毛皮の宝庫であるベルミの土地を恵与し、孫のドミトリー侯(1350～89)はマトフェイの甥のアンドレイ・フリャジンに同じ権利を安堵している⁽³⁶⁾。彼らはクリミアに毛皮を送り出すためにモスクワに定着した商人だったにちがいない。ドミトリー大侯はママイ軍と戦うとき10人のスロジャネをモスクワ軍に同行させたが、その中に1人のイタリア系のスロジャネがまじっていた⁽³⁷⁾。先のマッフエオやアンドレも多分スロジャネだったであろうし、したがってまたヴェネチア人だったと考えるべきであろう。

III

14～15世紀を通じて黒海沿岸が不断に供給しつづけた《商品》の一つに奴隷があったことは周知のことである。黒海から地中海各地に積みだされた奴隷の人種は、タタール人、カフカース人、ロシア人、ブルガリア人、ギリシャ人、ブラフ(ウラキア)人、モンゴル人など実にさまざまであった。奴隷の供給は戦争や略奪など不規則な要因に左右されたし政治情勢の変化にも影響を受けたから、その人種上の構成もたえず変動していたと思われる。しかし14～15世紀を全体としてみるならば、黒海貿易が供給した奴隷の人種上の構成比はタタール人、カフカース人、ロシア人の三つが最も大きかったといえるだろう⁽³⁸⁾。むろん奴隷の集配地として最大の機能を果たしたのは、他の商品の場合と同様ジェノヴァ人のカッファとヴェネチア人のタナとである。奴隷貿易ではヴェネチア人も決してジェノヴァ人にひけは取らなかった。他方、奴隷の買手は地中海の東端から西端までの各地にいたが、なかでもエジプトは男子奴隷の大量の需要地であった。13世紀中頃に成立したマムルーク朝のスルタンや有力武将たちは競って大量の白人少年奴隷を購入し、マムルークと呼ばれる兵士に養成して自分の軍事的藩屏としたからである。しかもマムルークの一部は上昇して部将やスルタンの地位に就き自分の故郷から大量の奴隷を買い入れて兵士にするということを繰り返したから、エジプトの奴隷需要はたえず再生産され尽きることがなかった⁽³⁹⁾。スルタンたちのハレム

(36) Грамоты Великого Новгорода и Пскова, М.-Л., 1949, №.87, стр.143-144.

(37) В.Е.Сыроечковский, указ. соч., стр.24-26.

(38) イタリア人の公証人が残した奴隷関係文書(売買や解放)を利用し、黒海から地中海各地に運搬された奴隷たちの人種、性別、年齢、価格、数量などにつき豊富なデータを示してくれるが、ベルギーの歴史家ウェルリンデンの著作 C. Verlinden. *L'esclavage dans l'Europe médiévale*. T. 2. Italie, Colonies italiennes du Levant, Levant latin, Empire byzantin. Gent, 1977. である。この著によれば、ジェノヴァやヴェネチアで取引された奴隷の大部分は黒海からの奴隷で、しかもそのうちタタール人、カフカース人、ロシア人のものが数量的に最も多いのである。ジェノヴァ (pp. 427-549) とヴェネチア (pp. 550-709) の章を参照。

(39) 大原与一郎『エジプト・マムルーク王朝』(近藤出版社) pp. 3-7, 219-232.

には無論、マムルークの妻妾も購入奴隷によって供給されたので、女奴隷の数も決して少なくはなかった。イタリア人、とりわけマムルーク朝で最も優遇されていたヴェネチア人はエーゲ海諸島やクレタの植民地を中継地に利用しつつ、盛んに黒海奴隷をアレクサンドリアに運んだのである⁽⁴⁰⁾。とはいえ奴隷需要者はエジプトやトルコなどのイスラム世界だけだったのではない。イタリアの諸都市には無論のこと、イベリア半島やフランス、ビザンツ、東地中海のラテン植民地域などキリスト教世界にも多数の奴隷がイタリア人の手で運ばれた。ただエジプトのスルタンと違って、西方の買手が主として求めたのは家内奴隷や妾に使う若い女奴隷であった⁽⁴¹⁾。都市貴族や富裕な商人の多くはみなこのような家内奴隷をかかえる習慣をもっていたから⁽⁴²⁾、その総需要は決して東方に劣るものではなかったのである。

黒海奴隷の最大の源泉は、金帳オルダールの政治支配に服しラテン人やロシア人からタタール(タルタル)人と呼ばれていたステップやヴォルガ沿岸のトルコ系の遊牧民と定住民である⁽⁴³⁾。アストラハン付近のモンゴル系タタール人も奴隷として売られたが、割合は少なかったようだ。エジプトの初期奴隷王朝(バハリー・マムルーク朝)では主としてトルコ系のマムルークが好んで利用されていたから、13世紀後半から14世紀末までの時期にはキプチャク人などトルコ系タタール人奴隷のエジプトへの輸出は相当な規模に達したと思われる。イル汗国を敵とする金帳汗国とマムルーク朝との政治的同盟も、両国間の奴隷貿易を一層促進した⁽⁴⁴⁾。エジプトに限らずイタリアやラテン植民地に搬出される黒海奴隷のなかでも、14世紀にはタタール人の比重が非常に大きかった。ヴェネチアがレヴァント貿易の最大中継基地として利用したクレタ島の例をみてみよう。このカンディアでヴェネチア人の一公証人が1381～83年の3年間に作成した408通の奴隷売買文書に記録されている奴隷の人種構成をみると、406人のうち93人22%がタタール人であり、しかも黒海からの奴隷約130人のうちに占める比重は7割を越えている⁽⁴⁵⁾。ヴェネチアやジェノヴァ本国でも14世紀のタタール人奴隷は非常に多く、ある研究によると1394～98年にジェノヴァで売買された奴隷の

(40) ヴェネチア人だけは特別にアレクサンドリアに2軒の商館を持ち最大の居留民をかかえ、ヴェネチア植民地だったクレタ島人のための商館も別に設けられていた。ジェノヴァ、ピサ、フィレンツェ、パレルモ、マルセイユなどほとんどの地中海商業都市の商館もあったが、つねに通商貿易第一位を占めたのがヴェネチアだったという。同上書 pp. 282-289.

(41) 前記ウェルリンデンの研究によると、西方に運ばれた奴隷は人種と時期により多少の差はあるものの、概して7～9割は女性である。14世紀後半の30年ほどの間にフィレンツェで取引された黒海奴隷を例にとると、タタール人は92%、ギリシヤ人は93%、ロシア人は92%が女性である。これほど極端でないにしても、女性が5割をわることにはほとんどないといってよい。

(42) 清水廣一郎『中世イタリア商人の世界』(平凡社) pp. 95-101.

(43) タタールとはもともとモンゴル人を指していたが、ロシアやヨーロッパに攻め込んだモンゴル部隊にはトルコ系遊牧民の方が多かったことから、ロシア人はトルコ系人種をタタール人と呼ぶようになる。14世紀にはロシアの年代記はポロヴェツ人(キプチャク人)さえタタールと呼ぶことになる。黒海にきたイタリア人たちの《タルタル》人概念もロシア人とそれほど大きな隔りはなかったと思われる。タナのヴェネチア人公証人の中には、稀にモンゴル人とタタール人を区別するものもいた。C. Verlinden. op. cit., pp. 570-573.

(44) アレクサンドリアには金帳オルダールのモンゴル人商館もあり、モンゴル人は支配領域下でとらえたキプチャク人やロシア人を大量に運んだといわれる。佐口透。前掲書。pp. 126-129.

63%がタタール人であった⁽⁴⁶⁾。しかし15世紀になるとタタール人奴隷の比重はどこでも相当に低下している。ジェノヴァ本国に入ったタタール人奴隷の比率は14世紀末の63%から、15世紀第一4半期の41%、第二4半期の20%弱と急激に落ち込んでいる⁽⁴⁷⁾。この現象の原因としては、第1に、タタール人奴隷の最大の集積地だったタナが1395年のチムールの攻撃で完全に破壊されたこと⁽⁴⁸⁾、第2に、15世紀の始めに金帳オルダー（エジゲイ汗）が支配下のタタール人に対しその子供の外国人への売却を禁止したこと、をあげることができる⁽⁴⁹⁾。

黒海奴隷の第二の供給源はチェルケス（シルカシア）人、アプハジア人、アラン人、メグレ人などのカフカース山地人である。これらカフカース諸種族のうち最も需要が大きくまた供給量も多かったのは、グルジアの山岳地帯に住んでいたチェルケス人である⁽⁵⁰⁾。チェルケス人の青年は勇敢で騎馬に長じ、しかも容姿も非常に端正であったことから特にエジプトのマムルークとして大量に買取られた。エジプトでは13世紀末からトルコ系マムルークとならんで次第にチェルケス人奴隷兵士が増大し、1382年以後は代々のスルタンや高位高官がみなチェルケス人マムルークの出身者で占められるようになる。いわゆるチェルケス・マムルーク朝の成立である⁽⁵¹⁾。イタリア人が黒海から運んだ奴隷たちの手で実にエジプトの歴史が書きかえられたのである。他方チェルケス娘の美しさもとりわけ評判が高く、西でも東でも引く手あまたであった。15世紀前半にヴェネチアで取引された年令20歳の女性の価格を比較してみると、チェルケス人女性の値段はロシア人、タタール人より平均10ドゥカトスも高くなっている⁽⁵²⁾。西方に搬出された奴隷のなかでも、15世紀になるとタタール人の比重低下に伴ってカフカース奴隷が多くなる。先に引用した研究によるとジェノヴァ本国では15

(45) C. Verlinden. op. cit., p. 870. この3年間にクレタで取引された奴隷の出身地をみると、大別して黒海からのものとバルカン=ビザンツ領起源のものがある。序に406名の人種構成を示すと、タタール93（22%）、ロシア16（3%）、チェルケス15（3%）、アラン1（0.2%）、モンゴル1（0.2%）以上は完全な黒海系奴隷で合計28.4%。ブルガリア127（31%）、ギリシャ119（29%）、アルバニア15（3%）、セルビア6（1.4%）、ワラキア6（1.4%）、ハンガリー1（0.2%）以上がバルカン=ギリシャ系で合計66%、ほかにサラセン人3とトルコ人3計1.4%がいる。約三分の一が黒海奴隷だが、黒海からはギリシャ人、ブルガリア人、ワラキア人奴隷も運ばれているからバルカン=ギリシャ系に算入したもののうち何%かは黒海奴隷の方にまわして計算せねばならない。

(46) C. Verlinden. op. cit., pp. 475-476. さらに時期をさかのぼって1374-1379年の間の45人の奴隷売買では実に45人中43人がタタール人である。

(47) Ibid., p. 484.

(48) チムールはタナ、アストラハン、サライという密接に結びついているアゾフ=カスピ海沿岸の通商路の全体系を破壊したから、奴隷に限らずアゾフ=サライ経由の交易は著しい打撃をうけた。タナは15世紀に再建されるものの、遂に14世紀の水準を回復することはなかった。タナの交易史はそれゆえ1395年で区分し前後二期にして語られている。Е. Ч. Скржинская, История Таны, стр. 50.

(49) G. Vernadsky. op. cit., p. 283.

(50) 現在ではロシア共和国内のチェルケス=カラチャイ自治州及びアドウイゲ自治州に住むカフカース西部のカフカース系人種である。

(51) 大原與一郎、前掲書。p. 63, 219. 1382年以後16世紀初めまで続くブルジー・マムルーク朝では、2人の例外（ギリシャ人）をのぞいてすべてのスルタンがチェルケス人出身者で占められ、それゆえチェルケス・マムルーク朝とも呼ばれる。

(52) C. Verlinden. op. cit., pp. 600, 616, 639.

世紀前半に、チェルケス人とアプハジア人の奴隷取引が占める割合は全体の36～37%に達し、チェルケス人だけで2～3割を占めたのである⁽⁵³⁾。このチェルケス人の故郷、奴隷商品の《エルドラド》であるカフカースに最も深く食い込んでいたのはジェノヴァ人であった。黒海とアゾフ海の東岸にいくつもの拠点をつくっただけでなく、クバニ河に沿ってカフカースの奥地に進んで一連の城塞を川沿いに築いている。彼らはそれらの拠点を足場に銀山の採掘や交易品（ろう、蜜）の集収にも従事したが、何よりも奴隷の入手に手を尽したのである。チェルケス人など山地住民には古くから子供（特に娘）を売る慣習があったこと、また山地一帯では多くの種族が敵対しあい捕虜を戦利品として奪いあう関係が存在していたこともイタリア人の奴隷獲得を容易にした⁽⁵⁴⁾。カフカースのジェノヴァ人はおそらく、後代のポルトガル人やスペイン人がギニア海岸で使ったようなあらゆる手段を駆使して奴隷を得ていたものと想像していいだろう。

黒海奴隷の第3の人種上の供給源はロシア人である。ロシア人が14～15世紀にトルコ系諸種族やチェルケス人のように大量にエジプトへ流入した痕跡はなく、ロシア人マムルークがスルタンになった例も聞かない⁽⁵⁵⁾。しかし彼らも地中海のほとんどの場所に搬出されていたことは疑いなく、スペイン、フランス、イタリアの諸都市、ビザンツ帝国の各地とキオス、クレタ、ロードスなどラテン植民地の記録にその足跡を残している。一般に西方に運ばれたロシア人奴隷の大部分は若い女性であった。1406～1455年にヴェネチア本国で作成された177通のロシア人奴隷に関する公証人文書のうち、157通89%が女奴隷、20通11%だけが男奴隷に係るもので、ロシア人女奴隷の対男女総奴隷構成比はタタール人の71%、チェルケス人の84%よりさらに高い⁽⁵⁶⁾。年齢をみると女性は8～50歳に分布しているが11～20歳が40%、11～30歳だと75%を占める。男子は10～40歳に分布するが10～16歳で72%を占め、女奴隷より一層若い少年が大部分である。価格は男女間でそれほど差はないが、女性の場合は個人差も大きく最大3～4倍のひらきがみられる⁽⁵⁷⁾。女奴隷の価格はイタリアでは概ねチェルケス人、ロシア人、タタール人の順に評価されていたらしい。ロシア人奴隷の供給量は14世紀には相対的に少い。タナの公証人が1359～66年の7年間に作成した奴隷文書の分析結果をみると、ここで買付けられヴェネチアに送られた249人の奴隷（タタール、ギリシャ、チェルケス、アプハジア、ミグレル、ブルガリア、ロシア人を含む）のうちロシア人は6例2.4%にすぎない⁽⁵⁸⁾。前に引用したクレタ島1381～83年の例では、406通のうち16通3%がロシア人奴隷に係るものだった（黒海からの奴隷に限定すると126通中の16通

(53) Ibid., pp. 484-487.

(54) П.П.Мельгунов, указ. соч., стр.137-139.

(55) スルタンになったロシア人はいないが、金帳汗国のジャニベク（1342-1357）統治時代にマムルークからアミールの地位に上昇したロシア人がいたという。G. Vernadsky. op. cit., p. 204.

(56) C. Verlinden. op. cit., pp. 598, 614, 636.

(57) Ibid., pp. 638-641.

(58) Е.Ч.Скржинская, История Таны, стр.53, прим.87.

で12.7%になる)。1289～90年にカフファで買付けられた奴隷でみると6.5%がロシア人である⁽⁵⁹⁾。1376年に一公証人の作成したジェノヴァでの奴隷取引文書62通のうちでは、たった一通1.6%だけがロシア人奴隷のものであった⁽⁶⁰⁾。しかし15世紀に入ると、タタール人奴隷の減少につれてロシア人の比重が大いに高くなる。ジェノヴァでの奴隷売買を扱ったある研究によると、15世紀第一4半期から第二4半期にかけてタタール人の全奴隷取引中の比重が41%から20%に低下するのとちょうど反対に、ロシア人の比率は20%から41.5%に上昇している⁽⁶¹⁾。ヴェネチアでの奴隷売買にも同様なロシア人の増加傾向が読みとれる。1400～1450年の半世紀をとってみると、14世紀にはごく稀だったロシア人奴隷の取引がタタール人のそれを凌駕し、ロシア人、タタール人、チェルケス人の構成比は100:73:44という割合をとっている⁽⁶²⁾。15世紀はロシア人奴隷が主流を占めた世紀である。しかしこの世紀の後半には、オスマントルコによるボスポロスの封鎖やカフファ占領に加え、イワン三世治下のロシアの政治的・軍事的強化がタタール人によるロシア人の略奪を次第に困難にし、黒海から西方に運ばれるロシア人奴隷は漸次減少の方向をたどる。ロシア人奴隷の黒海都市への供給は、主としてロシア人集落を襲って捕虜を取るタタール人の大小の略奪活動によって維持されていたからである⁽⁶³⁾。

IV

人間や商品を略奪して黒海に供給したのはタタール人だけではなく、実は北方のロシア人もこれに一枚加わっている。14世紀60年代から15世紀初めにかけて、ヴォルガ=カマ河の水路を舞台にウシクイニクと呼ばれるノヴゴロドの武装略奪者集団が猖獗する⁽⁶⁴⁾。ウシクイニクとは《ウシクイ》と呼ばれる川船に分乗して船団を組み、ヴォルガ沿いの都市や商人を略奪して廻った河川賊のことで、大部分は北部ロシアの都市国家ノヴゴロドの出身者から

(59) C. Verlinden. op. cit., p. 460

(60) Ibid., p. 475.

(61) Ibid., p. 485.

(62) この数字はヴェルリンデンが分析している公証人文書とそこで扱われている奴隷数を比にしたもので、実際の取引量ではむろんない。この比は1406-1455年にロシア177人分、1401-1450年にタタール人129人、チェルケス人78人が扱われていることから、ロシア人を100として割合をだしたものである。C. Verlinden. op. cit., pp. 598, 614, 637.

(63) А.Л.Хорошкевич, Русское государство в системе международных отношений конца 15 - начала 16 в., М., 1980, стр.30.

(64) ウシクイニクがロシアの史料にあらわれるのは1360年で最後に言及されるのが1409年であるから、丁度50年間にわたって盛んな動きをみせたことになる。モスクワ系年代記を中心に1360-1409年の半世紀間に合計13回彼らの略奪行動のことを記録している。むろん年代記に記録されたのは目立ったものだけであるから、実際の活動はずっと多かったと考えられる。ウシクイニク活動についての最もまとまった研究としては、В.Н.Бернадский, Походы ушкуйников на Волгу и Коми. в кн.:Новгород и Новгородская земля в 15 веке, М.-Л., 1961, стр.36-51.がある。

成っていた⁽⁶⁵⁾。ヴォルガやドンなどの大河川で軍隊や輜重の輸送に使われた最も一般的な川船はナサートといい、深い舷側と高くもち上った船首尾をもつ大型の平底船だった。ウシクイは14世紀の文献に初出するものでナサートよりやや小型の、一艘当り25～30人ほどの人間と輜重を積む能力のある新型の桡船だったらしい⁽⁶⁶⁾。ウシクイニク集団の規模はさまざままで、年代記の記録にある限りでも10艘200～300人から150艘4000～5000人までの大きな振幅をみせており、数字の記録がない場合にはもっと小さな部隊だったと想像される。彼らはドヴィナ地方を策源地としヴォルガ=カマ河上流で船団を組み中下流域に襲撃する点で共通するが、襲撃の対象や形態は部隊の規模に応じて多様であり、小船団で村や船を襲うこともあれば大部隊で都市を占領し略奪することもある。ヴォルガ上流にはロシア人の都市や村々が、中流にはヴォルガ・ブルガール人(カザン・タタール人)のそれが分布し⁽⁶⁷⁾、下流はサライヤアストラハンなどが金帳オルダールの政治的=経済的中心となつて黒海沿岸と一体をなしていた。ウシクイニクの活動範囲はこのヴォルガ・カマ水路の全域に及んでおり、その略奪行動は沿岸に居住し或は水路を利用するすべての民族・人種に向けられていて、非ロシア人だけとかロシア人だけとかに限定されていない。ロシア人の都市ではコストロマやニジニ・ノヴゴロド、ブルガール人の都市ではブルガルやジュコチンが幾度も占領や略奪をうけている。水路を往来して交易する商人たちについても、当時ロシアの年代記が一般に《ベセルメン》(広義にはイスラム一般、狭義にはヴォルガ・ブルガール人をさした)⁽⁶⁸⁾、と呼んだイスラム商人だけでなく、モスクワ大侯支配下のロシア人貿易商たち(この中には例のスロジャネたちもいたに違いない)も略奪をうけている。彼らの略奪行動がカマ・ヴァトカ河沿岸やヴォルガ上中流地帯で最も激しい形をとっていることは事実であるが、その行動範囲が金帳オルダールの中心サライヤアストラハンにまで及ぶことも決して稀ではなかった。例

(65) 《ウシクイニク》という呼び方はヴォルガ沿岸のニース地方のもので、モスクワ系年代記はウシクイニクをラズボイニク(強盗団)と言い替えたり両方を兼用したりする。ノヴゴロド年代記(第一)はウシクイニク、ウシクイの語を用いない。ノヴゴロドではヴォルガ略奪にでかける人々のことをマラツィイ(若衆たち)とかリユジ・マラドワイ(若者衆)とか呼んでいる。

(66) 13-15世紀のロシアの川船については、A. В. Арциховский, Средства передвижения. в кн.: Очерки русской культуры 13-15 вв., ч. 1, М., 1969, стр. 307-314. 参照。ウシクイの語はボモリア地方で白熊を意味し、白熊の頭を形どった船首をもっていたことからこの船の呼び名が生じたという。同上。p. 310-311.

(67) 10-13世紀に《ヴォルガ・ブルガール》王国として繁栄したトルコ系の定住民で、モンゴル来襲以後サライの金帳オルダールに服属するがなお独自の生活圏を保持しつづけた。ヴォルガ中流のカマ河付近に分布しブルガール市を首都にした。15-16世紀にはほぼ同じ領域にカザン・タタール汗国が形成され、それゆえカザン・タタール人はヴォルガ・ブルガール人と同一視されるが、これには異論もある。ヴォルガ・ブルガールについては梅田良忠『ヴォルガ・ブルガール史の研究』弘文堂1959. 参照。

(68) ヴォルガ・ブルガール人は10世紀頃から次第にイスラム教を受け入れていったために、14-15世紀のロシア史料は《ベセルメン》の語でブルガール人を示すことがしばしばある。チホミロフは14-15世紀のロシア年代記中に見るベセルメンは《イスラム教徒》一般を意味する場合と特にブルガール人を意味する場合があるのに対し、16-17世紀以後はもっぱらムスリム一般を示すようになったとしている。М. Н. Тихомиров, Бесермены в русских источниках. в кн.: Исследования по отечественному источниковедению, М.-Л., 1964, стр. 50-57.

えば1374年のウシクイニク部隊は90艘のウシクイでまずヴァトカの町を略奪し次いでブルガル市を占領したが、そのあと2つの船団に分れ40艘はヴォルガ上流一帯を荒し廻り他の50艘はヴォルガを下って金帳汗国の首都サライにまで遠征している⁽⁶⁹⁾。

彼らの行動は具体的にどのようなものだったろうか。プロコフ及びスモリヤニンという2人のノヴゴロド人に率いられた1375年のウシクイニク部隊を例にとってみよう⁽⁷⁰⁾。彼らは70艘のウシクイを操る2000人の部隊でまずヴォルガ上流のコストロマを占領する。町から出て迎え撃つ5000の防衛軍を挟撃して敗走させ、軍隊のなくなった市内に入ってまる一週間滞在し完全に略奪し尽す。彼らは奪ったすべての商品を船に載せようとするが積みきれず、軽くて高価な品だけを選んで他は川に捨てたり焼いたりした。しかし最も重要な戦利品である人間は捨てない。「沢山のキリスト教徒の人々を、男も女も子供も若者も娘も捕虜にして一緒に連れ去った」のである。次いで川を下りオカ河との合流地点にあるニジニ・ノヴゴロド市に行き、ここでもベセルメンやキリスト教徒の商人から商品を奪い、人々を「妻や子供とともに」捕虜にした。このあとカマ河沿岸を略奪し再びヴォルガを下ってブルガル市の中心都市ブルガル市に入って「すべてのキリスト教徒の捕虜を売払った」。一行はその後もベセルメン商人の殺害やロシア商人の略奪を繰り返しながらさらに川を下り、オルダーの中心サライやヴォルガ河口のアストラハン市に達する。しかし年代記はもう彼らがここで何をしたか伝えてはいない。ただアストラハンでサルチェイ汗の甘言に乗せられてひとり残らず殺されたうえ全商品が奪われたことだけが記され、キリスト教徒をベセルメンに売のような《強盗ども》の当然の末路であると聖書を引用して年代記は話をしめくくっている。以上から明らかのように、ウシクイニクの活動は純粹に略奪的な性格をもっている。略奪の対象は第1にヴォルガ水路を往来する商人たちの交易商品や沿岸商業都市の財貨、第2にヴォルカ・カマ水系一帯に住む住民（特にロシア人住民）の2つに中心がおかれていた。ウシクイニクたちが前者、つまり商品や財貨をノヴゴロドに持ち帰ったのか、或はヴォルガ水路のどこかで売却したのか明らかではない。ノヴゴロドは当時ロシア最大の国際的商業都市だったのだから、彼らが自分の都市の市場をあてにして略奪を行った可能性も充分にある。だがもう1つの略奪物《人間商品》の方はカスピ海＝黒海沿岸の国際奴隷市場なしには捌き得ないものであった⁽⁷¹⁾。ウシクイニクは明らかにこの市場をあて込んで大量のロシア人住民を略奪しているのであり、ブルガル市の都市で《ベセルメン》商人がそれを買い入れるのも黒海のイタリア商人への転売を前提にしてのことである。ウシクイニクが敢て同国人たるロシア人を主に捕えて売ったのは、ヴォルガ水路の政治的支配者であるオルダーとの関係上イス

(69) ПСРЛ, т.25, стр.189.

(70) いくつもの年代記に伝えられているが、ここでは《プロコフの死について》というタイトルを付して叙述されている『モスクワ年代記集成』(ПСРЛ, т.25, стр.191-192)でみておくことにする。

(71) カフカースから搬出された奴隷にはイタリア商人による黒海経由のものだけでなく、イスラム商人の手でペルシャ、アラビア、デルベントなど東方諸国に直接むかうものも多かったのである。П.П.Мельгунов, указ. соч., стр.138.

ラム教徒《ベセルメン》の略奪には大きな危険が伴ったからであろう⁽⁷²⁾。黒海から運びだされたロシア人奴隷の起源をすべてタタール人による略奪だけに帰するわけにはいかないのである。

ウシクイニクという現象は全体として14世紀におけるヴォルガ商業の著しい復活を歴史的前提にしている。キエフ時代にはロシアと東方諸国との基幹交易路であったヴォルガの商業はモンゴル人による破壊で13世紀に一時衰退するが、14世紀にはサライを含むカスピ海・黒海北岸商業の隆盛とともに急速に回復する。実際、14世紀は政治的にも経済的にも金帳汗国の最盛期だった⁽⁷³⁾。ヴォルガ下流に建設された新サライはチムールによる破壊(1395年)までの約1世紀間、バグダットやダマスカスにも比肩される当時の第1級の国際都市として繁栄した。東方諸国を8年遍歴して1333年にここを訪れたイブン=バトゥータはサライを世界でも最も美しい町と呼び、その大きさと殷賑ぶりを強調したくらいである。19世紀以来の発掘調査は彼の証言を裏づける大都市の姿を再現しており、ヤクボフスキーは人口20万以上と推定している⁽⁷⁴⁾。アラブ人の記録によれば、サライ市にはアラブ人、ペルシャ人、シリア人、イラク人、エジプト人、カフカース人、ギリシャ人、それにイタリア人とロシア人の商人がそれぞれ居留地をつくって住んでいた。この外国商人の民族構成が明示する如く、サライは東方諸国と黒海都市との結節点であった。たしかにクリミア都市の盛況もサライの繁栄も黒海岸=カスピ海北岸ルートとの東西交易なしには考えられないが、またヴォルガ水路によるロシアとの交易を無視しては成り立ち得ないものであった。ヴォルガはロシアと東方との基本ルートであると同時に、ドン水路とならぶもう一本のロシア=黒海岸ルートでもあった⁽⁷⁵⁾。東西で大きな需要のあったロシアの良質な毛皮はこの交易路によって東洋にも西洋にも供給され、逆に東西の物品はサライの結節点を経て同じコースでロシアに送られた。当然サライをはじめオルダー内の都市には相当数のロシア人商人が住み、それゆえサライ主教区が特別に設けられていたほどである⁽⁷⁶⁾。ヴォルガ水路のブルガル市やカザンにもロシア人が住み、反対に沿岸沿いのロシア都市ニジニ・ノヴゴロドにはタタール人、ブルガール人、アルメニア人などの商人が進出してきていた。最近の考古学的研究によれば、金帳オルダー

(72) タタール人や一般にムスリムを奴隷として掠めたり売買したりすることは、カフファやタナのイタリア人にとっても危険なことであった。オルダーの報復措置として都市住民に害が加えられることがよくあったからである。
Е.Ч.Скржинская, История Таны, стр.54-55.

(73) 一般にウズベク汗(1313-41)の時代がオルダーの最盛期とされる。彼の時代にベルケ汗によって受け入れられたイスラム教が最終的に定着した。新サライが首都に定められて国際都市として発展しただけでなく、ヴォルガ沿いにウケク、ペリジャメン、ギュリスタンなど一連の都市の成長がみられる。マムルーク朝やビザンツとの外交関係にも成功をおさめ、ロシア支配も比較的安定していた。しかし14世紀後半には長い不安定な権力闘争と内乱の時期に入り、1360年から1380年までの間に25人の汗が競いあい交替したといわれる。このような金帳オルダー内の不安定な政治状況が、ヴォルガ水路を舞台としたウシクイニクの跳梁を容易にした一つの条件だったことは否めない。

(74) ヤクボフスキー「金帳汗国首都サライの研究」播磨権吉訳『金帳汗国史』(生活社) p. 332.

(75) М.Н.Тихомиров, Пути из России, стр.57-59; он же, Средневековая Москва, стр.131-133.

(76) М.Н.Тихомиров, Пути из России, стр.59.

やカフカースや東洋諸国の諸商品は14世紀にはモスクワやトヴェリばかりでなく、ノヴゴロドにまでヴォルガ経由で盛んに運ばれていたのである⁽⁷⁷⁾。ウシクイニクの発生は14世紀のこうしたヴォルガ交易の復活なしには考えられない。彼らがヴォルガを航行する商人たちの略奪とヴォルガによって結ばれている市場への略奪奴隷の供給を主要な《仕事》としていたこと、この事実はウシクイニクとヴォルガ商業の結びつきをそのまま物語っている。ヴォルガ貿易の利益に最も有利に与り得る立場にいたロシア側の代表はモスクワだった。ノヴゴロドはモスクワをバルト海貿易から排除していた代りに、ヴォルガによる東方貿易と黒海交易から締めだされていた。ウシクイニクのヴォルガ進出は、この水路による交易の独占者に対するノヴゴロドの挑戦であり、その果実の分前を要求する暴力的表現だったといえるだろう⁽⁷⁸⁾。

(77) E.A. Рыбина, Археологические очерки истории новгородской торговли 10-14 вв., М., 1978, стр.19-52.

(78) 15世紀にアフアナシー・ニキーチンという、ロシア人ではじめて旅行記を残した商人が現われる。北部ロシアのトヴェリからヴォルガとカスピ海経由でペルシャ・インドへの7年間に及ぶ大旅行をし、帰りはトレビゾンドから黒海-クリミア経由でロシアにもどっている。『三つの海(カスピ海、インド洋、黒海)の旅行記』と題される彼の記録は、14-15世紀のロシア=黒海沿岸交易の発展とその重要性を前提にはじめて理解されうる。最後にV章を設けニキーチンの旅行記とその意味に触れて結びとするはずであったが、紙数がすでに大幅に超過しており、すわりの悪い結末のまま終ることになった。他日を期したい。

《 RÉSUMÉ 》

THE BLACK SEA AND RUSSIA
IN THE 14TH AND 15TH CENTURIES

Eizo MATSUKI

The author discusses a few aspects of the commercial contacts between Russia and Italian Black Sea settlements in the 14th and 15th centuries. After describing the emergence and rapid growth of the colonial cities on the coast of the Black Sea, like Caffa, Soldia, Tana, etc. in the second half of the 13th century, he reveals that Muscovy in the 14th century had much closer commercial connection with Soldia (*Surozh* in Russian) than with other settlements, and points out three reasons why Moscow preferred Soldia as her favorite trade partner. 1) Soldia had traditionally been one of the Crimean trade centers where Greek merchants had played a dominating role. 2) Throughout the 13th century, Russian merchants (especially of

southwest Russia) traded their goods and kept their settlement in this city. 3) For the first century of the Italian colonization, the Venetians held a dominant position in Soldia, not the Genoese, whose policies in the Black Sea settlements were often unfavorable for Muscovy.

The author also considers the problems of the slave trade in the Black Sea. He directs attention to the fact that the slaves transferred from the Black Sea in the 14th and 15th centuries were mainly composed of three ethnic groups: Tartars, Caucasians and Russians. In the 15th century, he points out that Russian slaves were the greatest in number of the three ethnic groups, while in the 14th century they had been far exceeded by the Tartars, who had been transferred to the East as well as to the West. Russian slaves were transported to and sold at every place in the Mediterranean: in Egypt, the Byzantine Empire, and the Latin colonies of Levant, Italy, France and Spain.

Lastly, in connection with the source of the Russian slaves for the Black Sea market, the author makes reference to the piracy of so called Novgorodian *ushkuinik* on the shore of the Volga river. He points out that they plundered Russian towns, villages and all sorts of ships trading on the Volga. Their booty was, first, goods and merchandise, and secondly, Russian people. Most of the Russian captives were sold to the *besermen* (Moslem or Volga Bulgarian) merchants, who supplied them to the Black Sea slave-market. The author also pays attention to the fact that the activity of *ushkuinik* was provoked in large degree by the recovery of the Volga trade in the 14th century.